

調査と研究

田畑幸嗣

文学研究科の考古談話会のメンバー、つまりは大学院生主体で発行している同人誌ですから、読者も大学院生が多いでしょう。そのつもりで書きます。

本号は論文2本が掲載されていますが、当初はそのほかに研究ノート1本、調査報告1本、そしてエッセイも1本予定されていました。ざっとタイトルだけ編集に教えてもらいましたが、学位論文に直結しそうなものから、どこが考古学の研究なのか理解に苦しむものまで様々でした。しかし、それはそれでよろしい。大学院在籍中に様々な文章を書いておくことは、必ず皆さんの将来の糧となります。

同じことは、調査にもいえます。様々な時代・地域の調査に参加することは、調査技術向上の為のまたとないチャンスですし、また研究の引き出しを広げることにも繋がります。是非積極的に参加してもらいたいと思っています。

でも、談話会の先輩のなかには、在籍中にとっても熱心に、たくさんの調査に参加したけれども、学部生のレポート以下の学位論文初稿しか書けず、提出を見送ったり、結局書き上げることが出来ずに大学院をドロップアウトしたりした人たちが少なからずいました。あれだけ調査に熱意をかたむけて、なぜそのようなことになってしまうのでしょうか。

調査に参加することで身につく能力は様々ですが、思いつくままに書き出してみると、測量、掘削、図化、写真、安全管理、書類作成、スケジュール作成・管理、資金管理、マネージメントなどになると思います。これらの能力は机にひとりで齧りついていても身につけません。教員や先輩、同期、後輩達と現場で苦勞をして、時には失敗をして、時間をかけなければ自分のものにはできないのです。

ですから、こうした能力を身につけた大学院生は、「仕事の出来る」院生と高く評価されることとなります。しかし、そうした院生がそれだけで「研究の出来る」院生と評価されることは絶対にありません。なぜなら、研究ができることを証明するには、学位論文を仕上げ、審査にパスしなければいけません。上に挙げた能力は、学位論文の執筆に必要なこと、つまり個々の研究には直結しないからです。

論文とは、論証のための文章です。オリジナルな問いがあって、論拠があって、答えがあり、それが論理的・客観的に妥当なものであると認められなければなりません。そのためには、たてた問いが、これまでの研究（問いと答え）に照らし合わせて意義のあることなのか判断する必要がありますし、問いを解くためのやり方（資料と調査分析方法）が適切なものなのかどうかを判断し、さらに分析を実行して、問いから答えまで、論理的に破綻のない一貫した文章に仕上げなければいけません。こうしたことは、机に齧りついたうえで、発表・ディスカッションをしない限り身につけません。バランスが必要です。

では、一年を通じて、調査参加と自分の勉強の時間を等分に振り分ければ、バランスよく両方の能力が身につけて、仕事が出来て研究の出来る人間になれるのでしょうか。これも絶対に違います。時間の問題ではありません。

研究、特に論文執筆に必要な能力を身につけるための行為は、すべて、知的なプレッシャーを必要とします。他人の言葉を理解し、反証し、自分の言葉を探し、それが適切なものなのかどうか、他者から批判を仰ぐという行為は、自分で自分を知的に追い込まないと出来ません。誰かの調査に参加し（あるいは自分の研究に直結しない調査を企画し）役割分担を決めて皆で仕事をすれば、苦しいことがあっても、知的な格闘を自分に仕掛けなくても済みます。知的な格闘を経ないのなら、どれだけ調査に参加しても、自分自身の研究の進捗は、ゼロです。ですが、調査に参加した達成感がありますし、「研究をした」気分になります。でも、それは百パーセント気のせいです。

談話会の先輩で、調査に熱心だけれども論文がいまいちだった院生は、大抵このパターンでした。逆に言えば、調査に出っぱなしでも、きちんと自分を知的に追い込んだ院生は、素晴らしい学位論文を仕上げています。調査技術を身につけるだけでなく、知的な格闘を経て、皆さんの経験を研究へ昇華させて欲しいと願っています。